

秋本番 その5

校長便りには、生徒の今の情報も盛り込みたいのですが、詳しく書ききれない様々な背景を生徒一人一人が持っているので、個人情報保護の観点から、アバウトに典型的にしか書ききれず、本来、一人一人が抱えている思いやその過ごし方に焦点を当てて伝えることができればいいのですが、できるだけ一人にフォーカスすることは、控えています。

ただし、その思いを伝えることができれば、磐城高校の今の姿を正面からとらえることができ、とても良いことだろうにとほぞを書くこともあります。

この時期の、お昼休みは、各クラスで昼食を食べる姿のほほえましさとともに、図書館において、その40分間を全力で学習に打ち込もうとする40人ぐらいの精鋭たちの姿は、鬼気迫るものがあります。

しんと静まり返っているところへ顔を出すと、ちらりと私の姿を一瞥するだけで、40分に集中する背中から漂っているオーラのすごさは、まず見てみないとわかりません。

やがて、このオーラが伝播して、各教室にも漂い始めるのが、10月中旬でしょうか。11月では遅いのです。集中の季節は、波のように立ち代わり立ち代わり教室に打ち寄せていくと、教室全体が大きなうねりになって、煌々と輝く蛍光灯の光の中で、知識が定着していくのです。

さしずめ、この体験がないと、この学校に来た意味はありません。個人の学習を超えた集団におけるうねりのような学習の時間の塊での体験が、次の時代を作り上げる大きなベクトルになると考えます。

朝、6時過ぎから学校へ向かう道すがらにおいて、一日をシミュレーションし、何度も何度も振り返りながら前を向いて新しい挑戦を継続し、深く考える時間を担保しつつも、課題解決のためのルーティーンをこなしていくことができれば、自分の未来への扉が少しずつ開くのを実感できると考えます。

種は巻いてありますので、芽を出し葉を茂らせ、たわわに実る実を刈り取り結実をためていくことができれば、怖いものはありません。

「今日はどうだ。」

「まあまあです。」

「そうかよかったな。」

これだけの会話でも、心はつながるのです。

表情の一つ一つに心の内が現れます。「うまくいってないな。」とか、「吹っ切っているな。」とか、「あきらめないことだぞ。」とか、言葉にできない思いを言葉ではなく伝えていきますので、彼ら彼女らは感じてくれていると思います。校長は、いつものように歩いて、いつものように授業を見て歩き、いつものように校長便りを積み重ねます。

